未破裂遠位前大脳動脈瘤に対する塞栓術の有用性

Endovascular coil embolizations of unruptured distal anterior cerebral artery aneurysms

赤路 和則[1)]　冨尾 亮介[1)]　吉田 啓佑[1)]　高橋 宏典[1)]　西 佑治[2)]　堀越 知[2)]

1)公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 脳神経外科

2)公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 脳卒中科

[目的]未破裂遠位前大脳動脈瘤に対する瘤内塞栓術は、microcatheterの進入経路が長く屈曲しているためcatheter controlが困難であること、親血管が細いためcoilが親血管に露出しやすいこと、開頭clipping術が困難ではないことから良い適応かどうかは疑問である。当院の治療経験より、未破裂遠位前大脳動脈瘤に対する瘤内塞栓術の有用性を検討した。

[方法]当院で2001年11月から2020年11月までに瘤内塞栓術を施行した未破裂遠位前大脳動脈瘤15例16手術を対象とした。年齢は51歳から80歳、平均68.3歳、男性4例、女性11例であり、瘤の最大径は2.6mmから11.5mm、平均5.1mmであった。

[成績]塞栓術手技はdistal access catheter使用13例、Neuroform Altas使用1例、catheter assist technique1例であり、balloon assist technique例はなかった。12例でEchelon10を使用していた。手技に伴う永続性合併症はなく、14例で3ヶ月後mRSが0、内頚動脈瘤破裂によるSAHに伴った未破裂瘤の1例で3ヶ月後mRSが1であった。16手術の術直後DSA所見は、6例でcomplete occlusion、9例でneck remnant、1例でbody fillingであった。平均追跡期間3.7年で、術後破裂はなく、1例で再発を認め、再塞栓術を行った。最終MRA所見は、15例中7例でcomplete occlusion、8例でneck remnantであった。

[結論]当院における未破裂遠位前大脳動脈瘤に対する瘤内塞栓術では、手技に伴う永続性合併症はなく、再発1例であり、治療成績良好であった。未破裂遠位前大脳動脈瘤に対する瘤内塞栓術は有用であると考えられた。